

# 「ギャング」「チャム」「ピア」グループ概念を基にした 「仲間関係発達尺度」の開発

—スクールカウンセリング包括的評価尺度（生徒版）の開発の一環として—

黒沢 幸子

（目白大学人間社会学部心理カウンセリング学科）  
寺崎 馨章 大場 貴久 有本 和晃  
（KIDS カウンセリングシステム）

森 俊夫

（東京大学大学院医学系研究科）  
張替 裕子  
（目白大学心理カウンセリングセンター）

## <要 旨>

スクールカウンセリング包括的評価尺度（生徒版）、CAN-SCS、Student's Version の開発の一環として、これまで実証的研究が少なかった子どもたちの仲間関係発達を測定する尺度を開発した。関東近県の公立小・中・高等学校児童・生徒 4527 名が調査対象となったが、まず各学年から、男女 75 名ずつを無作為抽出し、小学 4 年生以上の各学年 150 名、計 1350 名を対象に因子分析を行い検討し、最終的に中・高校 900 名を分析対象とした。仲間関係発達尺度は、〈ギャング・チャム〉〈ピア・プレッシャー〉〈ピア〉の 3 因子、各因子 5 項目による 15 項目により構成され、その一定の信頼性と妥当性が確認された。さらに各因子における学年・性別の基準値が設定された。3 因子のうち、なかでも〈ピア・プレッシャー〉因子は、臨床的にも有用な視点を提供できると考えられ、また子どもたちの自立達成は、〈ピア〉に移行する過程で、〈ギャング・チャム〉と〈ピア・プレッシャー〉、つまり「親密さ」と「同調圧力」が、並存し表裏をなす性質であることが示唆された。本尺度の開発は、スクールカウンセリングの個別相談、及びニーズ・アセスメントや介入効果を測定するツールとしても有益なものと考えられる。

## <キーワード>

仲間関係、スクールカウンセリング、思春期青年期、発達、尺度、生徒

### 【はじめに】

近年、児童・生徒の不登校、いじめ、暴力行為、中途退学など、子どもの心の問題は憂慮すべき状況にあり、これら問題に対応すべくわが国におけるスクールカウンセリング（以下 SC）関係事業は近年急速に規模を拡大している。SC が全国的に広がりつつある現在、教職員・児童生徒・保護者の 3 者のニーズに基づき、その評価に照らされたスクールカウンセリング・システム（以下 SCS とする）の構築及び実践活動が不可欠である。筆者らは、包括的 SCS の構築を意図し、

実際に SC 活動を行うとともに、包括的なニーズ・アセスメント尺度 CAN-SCS（Comprehensive Assessment of Needs for School Counseling System）を作成し、SC 活動の効果評価研究を同時に行っている（森, 2001）。CAN-SCS は、教員、保護者、児童生徒の 3 つのバージョンから構成され、顕在的・潜在的両ニーズを捉え、かつ SCS 導入後の評価にも対応できることを意図して開発した。そのうち、教員と保護者を対象にした CAN-SCS, T-Version

(Teacher's Version) 及び P-Version (Parents' Version) については既にその信頼性と妥当性の検討が行われ、ほぼ完成をみている(黒沢・森ほか, 2001; 黒沢・森ほか, 2002)。

学校教育サービスの直接のユーザーは生徒である。生徒を対象にしたの SC へのニーズ評価尺度の開発が急がれるが、わが国にそれに当たるものはほとんど存在せず、また SC 先進国の米国のそれは、多くの場合、SC に何を望むかを問う、顕在的ニーズを査定するものである(中野ほか, 1998)。CAN-SCS、S-Version (Student's Version) は、生徒の潜在的ニーズ測定をも包含した包括的ニーズ評価尺度として開発されるものである。

CAN-SCS、S-Version は複数の尺度から構成されるものであるが、筆者らのその開発にあたり、子どもたちの仲間関係に関する尺度を含めたいと考えた。SC 領域において極めてよく取り上げられる不登校やいじめといった問題は、しばしば周囲の子どもたちとの関係上の葛藤や集団への馴染み難さに、その端を発するものであり、それらの問題と仲間関係の発達とは、切っても切れない関係にある。子どもたちの仲間関係が SC 活動の潜在的ニーズとして把握され、その側面からも SC 活動が評価されることはきわめて重要であると考えたからである。

児童期から思春期の仲間関係について、保坂(1996)は、学生相談におけるエンカウンター・グループの事例研究(保坂・岡村, 1986)の知見を発展させ、小学生(児童期後半)のギャング・グループ(gang-group)、中学生(思春期前半)のチャム・グループ(chum-group)、高校生の(思春期後半)のピア・グループ(peer-group)という発達段階を仮説として提唱している。ギャング・グループは、ギャング・エイジ(gang-age)

に由来し、同一行動による一体感を特徴とする(男子に多く見られる)同性同輩集団である。チャム・グループはチャム(親友; chum)(Sullivan, 1953)を語源とし、同一言語による一体感の確認を特徴とする(女子に多く見られる)同性同輩集団である。ピア・グループは、自立した個人として尊重し合い、異質性を認めることが特徴の性別年齢混合(が可能な)集団である。黒沢(2001)は、いじめに悩み不登校に陥った中学生女子を援助する上で、この仲間関係発達の概念を用いることが効果的だった事例を報告している。しかしながら、仲間関係発達段階仮説に対する、実証的な研究はほとんどなされておらず、この概念に沿った研究としては、わずかに斎藤(1986)、手塚・古屋(2001)があるのみである。

筆者らは、仲間関係発達段階仮説を、より臨床的な視点に立ち、その発達段階のもつリスクファクター(危険因子)も含めて、実証的に検証し、CAN-SCS、S-Version 開発の一環とすることを目的として、まず、ギャング・グループ、チャム・グループ、ピア・グループの概念に沿った仲間関係の発達段階を測定する尺度を開発することを試みた。その結果<ギャング・チャム><ピア・プレッシャー><ピア>の3因子が抽出され、3因子各6項目による18項目の尺度が構成された(黒沢・有本・森, 2003)(以下、試作版と呼ぶ)。試作版では、仲間関係発達の実証的研究として有用な視点の提供が示唆されたが、サンプルの偏りから、性別や校種による比較などの分析ができず、かつ尺度の信頼性の面で課題を残し、更なる実証的知見をあわせて検討していくことが求められた。

そこで本研究では、仲間関係発達尺度の信頼性と妥当性を高め、中高生の学年・性別の基準

値を設定し、仲間関係発達段階の推移を検討しその性質をより明らかにし、本尺度を実用に資するようにすることを目的とする。

## 【方法】

### 1. 対象および調査方法

2002年8月に、ある民間研修機関の教育相談プログラムに参加した、関東近県の公立小・中・高等学校の教員に調査の趣旨を説明し協力を求めた。思春期の児童・生徒を対象とする関係上、小学校では4年生以上を対象とした。質問紙は各教員によりそれぞれの学校において、同年10月にクラス単位で実施され同月に配布回収。公立小学4校(624名)、公立中学16校(2291名)、公立高校3校(920名)、計3835名から回答が得られた。さらに前年度2001年11月及び12月にも、生徒理解の一助とするために同調査が公立中学3校(692名)で実施されており、両年度を合わせた計26校、4527名(男子2075名、女子2143名、性別不明309名)が対象となった。

次に、各学年間の対象数及び男女比の違いが分析に及ぼす影響をなくすため、各学年からそれぞれ男女75名ずつを無作為抽出した。結果、小学4年生から高校3年生まで、各学年150名、計1350名が分析対象となった。抽出した75名の代表性については、抽出されなかった対象との間でMann-WhitneyのU検定を行い確認した。

### 2. 質問紙の構成

質問紙は以下の3尺度から構成される。

①仲間関係発達尺度：18項目の仲間関係における自身の行動や考えが列記されており、回答者は各項目について、「そう思う」から「思わない」

までの4段階で評価する(分析する際に3-0に得点化)。尺度構成の手続きとして、まず、保坂(1996)などの参考文献をもとに、ギャング、チャム、ピア各グループの概念に沿った児童・生徒の行動や考えの特徴を抽出した。そこに、著者らのSCや心理臨床の経験から、児童・生徒の語る仲間関係に関する特徴的な表現を加味し、複数の学校教員の意見を参照して、生徒が仲間関係について日常生活において体験しうるなるべく多くの行動や考えが提示できるよう28項目を選択した。この28項目版を用いて2001年9月から10月に小・中・高校生を対象に調査を実施し、公・私立合計16校、1946名(小学校356名、中学校843名、高等学校747名；男子1105名、女子841名)から回答を得た。因子分析の結果3因子解を採用し、信頼性および妥当性を検討した結果から項目の選択、改訂を行い、18項目からなる仲間関係発達尺度(試作版)(黒沢・有本・森, 2003)を作成した。

本調査においては、この試作版に対して一部質問項目の修正を加えた、全18項目からなる尺度が用いられた。

②アイデンティティ尺度：下山(1992)が作成した尺度で、その信頼性と妥当性は既に報告されている。自己の主体性や信頼の形成を示す<アイデンティティの確立>と、自己の安定が得られず不安や孤独を示す<アイデンティティの基礎>の2つの下位尺度(各10項目)からなり、4件法で評価する。分析の際は、各下位尺度の得点を持ちいる。

③ストレス反応尺度(短縮版)：岡安・高山(1999)が作成した尺度で、その信頼性と妥当性はすでに報告されている。<身体症状><抑うつ><怒り><無力感>の4下位尺度(各4項目)をからなり、4件法で評価する。分析の

際は、各下位尺度合計得点をもちいる。

以上 3 尺度のほか、対象者全員に基本属性（性別、学年、年齢）が尋ねられた。

### 3. 分析方法

尺度の構造を検討する目的で、仲間関係発達尺度全 18 項目について、3 因子に固定して因子分析（主因子法・プロマックス回転）を実施した。結果、試作版での分析結果とほぼ同様の因子構造が得られ、固有値の落差や解釈可能性から見ても、3 因子解が妥当と判断した。その後、因子の内的一貫性を低下させないということと、単一因子にのみ因子負荷量が高いことを基準として項目を選択し、3 項目を除外した。選択された 15 項目で再度因子分析をしたところ、各 5 項目からなる 3 因子構造が認められた。

信頼性の検討では、内部一貫性を示す Cronbach の  $\alpha$  係数を算出した。小・中・高等学校別に各因子の  $\alpha$  係数を算出したところ、小学校群では中学校群と高等学校群に比べ、 $\alpha$  係数の低下 (0.07~0.12 程度) が見られた。そこで、小学校のみを除外した中・高等学校のデータで再度因子分析を行ったところ、同様の 3 因子構造が得られた。よって、以下の分析では中・高等学校のデータにて行うこととした。また、妥当性の検討では、尺度間の相関については Pearson の積率相関係数、学年間の尺度得点の比較は一元配置分析によって行われ、多重比較検定の際には Bonferroni 法が用いられた。統計解析には SPSS11 を用いた。

#### 【結果】

1. 仲間関係発達尺度の因子構造と内部一貫性  
全 15 項目の因子分析の結果を TABLE 1 に示す。

TABLE 1 仲間関係尺度の因子分析

	因子		
	F1	F2	F3
5. 仲間はずれにされたくないの、話をあわせる	0.73	-0.04	-0.01
3. 友だちと話が合わない不安だ	0.70	-0.10	0.07
16. 友だちと同じことをしていない不安だ	0.65	-0.02	-0.02
7. グループから抜けるには、それなりの覚悟が必要だ	0.49	0.12	0.03
10. 他のグループには入りにくい	0.48	0.01	-0.03
13. いつも友だちとつるんでいる	-0.12	0.65	0.06
11. 友達いつも一緒に遊びたい	-0.09	0.57	0.06
8. グループの仲間同士で固まっていたい	0.27	0.51	-0.15
17. 仲間うちの言葉や秘密があるとうれしい	0.13	0.41	0.08
6. いつも一緒に行動している人が友だちだ	0.18	0.35	-0.11
12. 違う意見を交換し合うことで、お互いを高め合える	0.00	0.13	0.64
4. お互いの違いを認め合える仲間が良い	0.08	0.02	0.60
9. 考え方が違う人が刺激になる	0.04	-0.11	0.57
2. 年齢や性別の違ういろいろな人と一緒にいたい	-0.05	0.04	0.41
18. 目上の人や上級生の方が意見が合う	-0.07	0.00	0.24
寄与率(%)	24.31	12.96	8.38
$\alpha$ 係数	0.73	0.67	0.61

第 1 因子は、「仲間はずれにされたくないの、話をあわせる」、「友だちと話が合わない不安だ」などの 5 項目からなり、＜ピア・プレッシャー＞因子と名付けられた ( $\alpha=0.73$ )。第 2 因子は、「いつも友だちとつるんでいる」、「友だちいつも一緒に遊びたい」、などの 5 項目からなり、＜ギャング・チャム＞因子と名付けられた ( $\alpha=0.67$ )。第 3 因子は、「違う意見を交換し合うことで、お互いを高め合える」、「お互いの違いを認め合える仲間が良い」、などの 5 項目からなり、＜ピア＞因子と名付けられた ( $\alpha=0.61$ )。

さらに、尺度の安定性を検討するため各 3 因子の  $\alpha$  係数の値を性別で比較した。＜ピア・プレッシャー＞因子の  $\alpha$  値は、性別ではほとんど影響を受けず、ある程度の内部一貫性を保っていた (男子: 0.74; 女子: 0.71)。＜ギャング・チャム＞因子 (男子: 0.72; 女子: 0.61) および＜ピア＞因子 (男子: 0.64; 女子: 0.55) につ

いては、女子で低下が見られた。

## 2. 相関分析

構成概念妥当性を検討するため、仲間関係発達尺度の 3 下位尺度、アイデンティティ尺度の 2 下位尺度、およびストレス反応尺度の 4 下位尺度間の相関をそれぞれ検討した。Pearson の積率相関係数を TABLE 2 に示す。

仲間関係発達尺度間では、〈ギャング・チャム〉と〈ピア・プレッシャー〉間で正の相関 ( $r=0.489, p<0.001$ ) が認められた。仲間関係発達尺度と他の尺度との間においては、〈ピア・プレッシャー〉と、〈アイデンティティの基礎〉間で負の相関 ( $r=-0.503, p<0.001$ )、〈ピア〉と〈アイデンティティの確立〉の間で正の相関 ( $r=0.371, p<0.001$ ) が認められた。さらに〈ピア・プレッシャー〉と〈抑うつ・不安〉の間で弱い正の相関、( $r=0.245, p<0.001$ ) が認められた。

## 3. 仲間関係発達尺度の基準値と学年間比較

発達に伴う仲間関係の変化を検討するため、各因子ごとの平均値を学年別に算出し、その値をそれぞれの発達段階における基準値とした。また、個々の被験者の特徴を視覚的に把握する

ために、各因子得点の学年および男女別のパーセントイル分布表を作成した (APPENDIX)。さらに、学年の上昇に伴う仲間関係の変化を検討するため、各因子それぞれの学年推移について FIGURE 1 に示した。

〈ギャング・チャム〉、〈ピア・プレッシャー〉、〈ピア〉それぞれの因子得点について、一元配置分散を行ったところ、有意差が認められた (それぞれ  $F(5, 894)=4.26, p<0.01$ ;  $F(5, 894)=3.34, p<0.01$ ;  $F(5, 894)=6.61, p<0.001$ )。〈ギャング・チャム〉得点は、中学 1 年から高校 3 年まで緩やかな減少傾向が見られた。さらに、多重比較検定 (Bonferroni 法) したところ、高校 3 年と中学 3 年を除く他のすべての学年との間に有意差が認められた ( $p<0.05$ )。〈ピア・プレッシャー〉得点は上昇・下降の変化を続けながら、高校 3 年時に最も低くなった。また、〈ピア〉得点は、中学 1 年から学年の上昇とともに増加し、高校 3 年では中学 1、2 年との間で有意差が認められた ( $p<0.05$ )。

### 【考察】

#### 1. 仲間関係発達尺度の因子構造

筆者らは仲間関係発達尺度試作版作成当初、

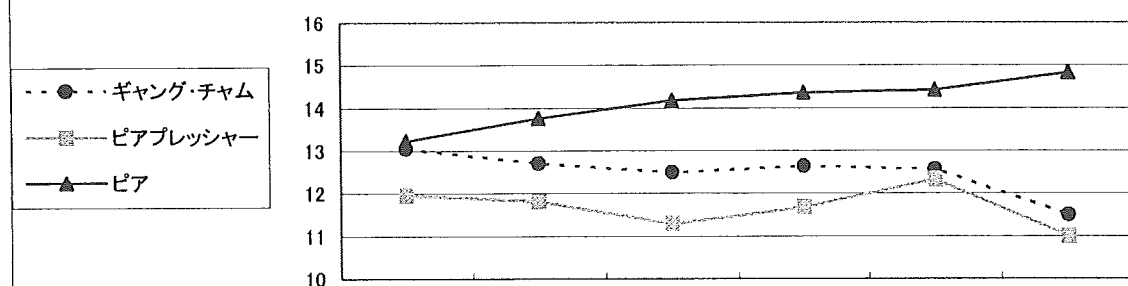
TABLE 2 尺度間の相関

	仲間関係発達尺度			アイデンティティの確立		ストレス反応		
	ギャング・チャム	ピア・プレッシャー	ピア	確立	基礎	身体的症状	抑うつ・不安	不機嫌・怒り
ピア・プレッシャー	0.489**							
ピア	0.134**	0.124**						
アイデンティティの確立	0.003	-0.165**	0.371**					
アイデンティティの基礎	-0.169**	-0.503**	-0.122**	0.223**				
身体的症状	0.061	0.152**	0.111*	-0.161**	-0.365**			
抑うつ・不安	0.087**	0.245**	0.140**	-0.183**	-0.480**	0.503**		
不機嫌・怒り	0.143**	0.152**	0.097*	-0.124**	-0.324**	0.529**	0.559**	
無力感	0.134**	0.196**	0.085	-0.267**	-0.367**	0.492**	0.435**	0.454**

\*\*  $p<0.001$

\*  $p<0.01$

FIGURE 1 仲間関係発達尺度因子得点の学年推移



		中1	中2	中3	高1	高2	高3
ギャング・チャム	平均	13.05	12.70	12.49	12.64	12.56	11.50
	S.D.	3.11	3.17	3.22	2.88	3.13	3.07
ピアプレッシャー	平均	11.97	11.81	11.28	11.67	12.32	11.00
	S.D.	3.42	3.19	3.24	2.99	3.15	3.08
ピア	平均	13.23	13.75	14.17	14.35	14.41	14.82
	S.D.	2.51	2.79	2.80	2.76	2.36	2.75

仲間関係発達尺度は、保坂(1996)が提唱した、ギャング・グループ、チャム・グループ、ピア・グループという発達段階を踏襲して、これらの3因子構造を想定していた。しかしながら、抽出された因子は、今回の調査でも試作版でも同様に<ピア・プレッシャー><ギャング・チャム><ピア>の3因子であった。

<ギャング>と<チャム>の項目は、混ざり合った形で第2因子を構成し、それぞれが分かれて独立の因子を構成することはなかった。前青年期から青年期の仲間関係についての先行研究のなかで、「gang-relation」「chum-relation」「peer-relation」の3因子を抽出したという報告(手塚・古屋, 2001)があるが、質問紙の項目構成が本研究で用いているものとは異なるため、これらの結果を単純に比較して、<ギャング><チャム><ピア>の概念について論じることはできない。しかし、本研究で用いた項目によっては、<ギャング>と<チャム>は明確に分かれなかった。「行動による同一性」と「言語による同一性」は、対象年齢層集団によって、分離・独立して認知されていないことが示唆された。この理由については、筆者らの臨床経験に基づいた感覚から、子どもたちは、近年、小学生時代にギャング・グループを十

分に形成することなく、チャム・グループへと移行したり、逆に中学生になってからギャング・グループを形成したり、その境界の曖昧さ、あるいは順序の逆転が起こっているのではないかと思われる。小学校時代には、自由な遊び場の減少や、親/大人たちからの管理統制によりその行動が規制され、「行動による同一性」は中学生以降になって初めて十分に体験されうるのかもしれない。またマスメディアやコンピュータ・ゲームの早期からの影響により、子どもたちの発達の早い時期から「言語による同一性」が形成されるのかもしれない。

<ギャング>と<チャム>が分かれて抽出される代わりに、<ピア・プレッシャー>が独立した因子として抽出された。ピア・プレッシャーに関しては、集団への同調性の強さは現代青年の特徴を表すものと推定され(上野・上瀬・松井ら, 1994)、反社会的問題行動である「援助交際」の動機や背景要因として、友人や集団への「同調圧力」が指摘されてもいる(福富, 1997; 宮台, 1998; 櫻庭・松井・福富ら, 2001)。また、保坂(1998)によれば、異質性が認められるピア・グループに至る以前のギャング・グループやチャム・グループにおいては、仲間集団が同一であることが絶対条件とされ、親密さのなかで仲間

と同じであるようにピア・プレッシャー（仲間からの圧力／同調圧力）がかかるとされ、ピア・プレッシャーは万引きや喫煙などの反社会的集団行動の要因、あるいはゲームとしての「仲間はずし」が生じる要因でもあり、陰湿な仲間はずしが近年の「いじめ」であると指摘される。

本尺度で抽出された3因子〈ギャング・チャム〉、〈ピア・プレッシャー〉、〈ピア〉は、近年の子どもたちの仲間関係発達の特徴、つまり「親密さ」と「ピア・プレッシャー（同調圧力）」という両価性、及び発達段階に潜む病的側面をとらえたものであり、臨床的有用性を含むものと思われる。

## 2. 仲間関係発達尺度の信頼性

各3因子の $\alpha$ 係数は、学校種別では中・高等学校に比べ小学校で低下が見られ、結果小学校のデータは分析から除外することとした。今回の結果からだけでは即断できないが、本尺度の小中学生への使用については慎重でなければならないと考える。

性別による比較では〈ギャング・チャム〉および〈ピア〉で、女子の方が男子より $\alpha$ 係数が低いという結果が得られた。著者らは、これまでの臨床経験から男女の仲間関係の発達には質的な違いがあると考えており、この結果がその男女差を示す指標の一つであると推測するが、仲間関係の発達に性別が及ぼす影響についてはこれまで実証的な研究がほとんどなされておらず、今後更なる研究が必要である。

各因子についての信頼性については、第1因子〈ピア・プレッシャー〉の $\alpha$ 係数は0.73とほぼ十分な値が得られ、またそれは学校種、性で影響をほとんど受けることなく安定した内部一貫性を示していた。第3因子〈ピア〉の $\alpha$ 係数

は0.61で、3因子中最も低い値を示した。もともとピア・グループは高校生において想定された仲間関係であり、経験していないという点では最もイメージしにくい因子であり、因子としてのまとまりが3因子中最も低くなりやすいと考える。

このように、いくつかの課題はあるものの、本尺度の信頼性はある程度保証されていると考える。

## 3. 仲間関係発達尺度の妥当性

仲間関係発達尺度の下位尺度〈ピア・プレッシャー〉と、アイデンティティ尺度の下位尺度〈アイデンティティの基礎〉との間に有意な負の相関が認められた。〈ピア・プレッシャー〉とは仲間への同調圧力の度合いを示すものであり、不安や孤独に襲われる気持ちを示す〈アイデンティティの基礎〉との負の相関を示すことは、妥当である。また、〈ピア・プレッシャー〉は、〈抑うつ・不安〉との間に弱いながらも正の相関が示された。ピア・プレッシャーの高まりが、抑うつ、不安といったストレス症状の増加につながることは構成概念上妥当な結果である。また、〈ギャング・チャム〉や〈ピア〉に比べ、総じてストレス症状との相関が高いことから、児童・生徒への予防的あるいは治療的介入に有用な概念として特に重要であろう。さらに、仲間関係発達尺度の下位尺度〈ピア〉は、思春期後期の発達課題である〈アイデンティティの確立〉と有意な正の相関を示した。これらのことは、仲間関係発達尺度の構成概念（交差）妥当性を一部保証しているといえる。

仲間関係発達尺度得点の学年推移の全体的な傾向に関しては、まず、〈ピア〉得点が学年を増すごとに増加し、〈ギャング・チャム〉、〈ピ

ア・プレッシャー>が、増加・減少を繰り返しつつも、全体的な傾向としては減少しているという結果は、成人に近づくほど人々はそれぞれ独立した個人を保ちつつ、目的志向的な集団を形成するという意味で、本尺度の構成概念妥当性を保証する結果である。

さらに3因子の学年推移を見るならば、中学1年生から仲間関係の3因子の構成が徐々に変化し、ピア・グループ形成へと移行していくことがわかる。仲間関係尺度試作版の結果では、<ギャング・チャム>の性質は小学校において最も優位であることが示されたが、その優位性が徐々に減少し、<ピア>へと変質していく中学の時期は、児童期の仲間関係の終焉であり、その後思春期の仲間関係へと移行していくことが考えられる。また、最終学年である中学3年、高校3年では、<ピア・プレッシャー>の低下が見られるが、これらの学年では今までの学校の仲間関係に一度区切りをつけ、同調圧力が一時的に低下する時期なのかもしれない。この点についても更なる研究が必要である。

#### 4. SC活動における本尺度の意義

本尺度は、SC活動において、①仲間関係の発達段階や状態についてのアセスメント；潜在的ニーズを査定することで指導援助の方向性を見出す、②心理教育プログラムの介入効果の評価；たとえばピアサポート（同輩支援）・プログラム等の導入の効果を測る、③相談室での相談補助ツールとしての利用；仲間関係の個別相談に活かす、④学級プロフィール（学級風土）の描写；学級集団で実施した場合、3因子の得点の高低から、学級プロフィールを描くことができ、それと学級内での出来事を照合することにより、その学級に必要な援助介入の方向性を明

らかにしうる、といった意義があると考えられる。

また本研究で作成された各下位尺度の中高生の学年・男女別基準値（APPENDIX）は、これら①から④の実用に貢献できるであろう。

#### 5. 本研究の今後の課題

本研究の今後の課題としては、学校対象を広げ、縦断調査を行い仲間関係の発達過程を検討していくことである。また、仲間関係と現在学校現場で問題となっているいじめ、不登校、精神疾患などとの関連性を検討することにより、より臨床的に有効な知見が得られることが期待される。さらに、仲間関係の発達を規定するさまざまな因子やその影響についても今後の研究を深める必要がある。

#### 【結語】

本研究において、これまで実証的研究が少なかった子どもたちの「仲間関係」発達を測定するための自記式尺度を開発した。本尺度は<ギャング・チャム><ピア・プレッシャー><ピア>の3因子各5項目による15項目から構成され、その信頼性と妥当性が確認された。さらに仲間関係発達尺度の各因子における中高生の学年・性別の基準値を設定した。

3因子のうち、なかでも<ピア・プレッシャー>因子は、臨床的にも有用であり、思春期前期から後期の生徒を理解するうえで有用な視点を提供できると考えられた。子どもたちの仲間関係の発達段階において、自立が達成されていく過程で<ギャング・チャム>と<ピア・プレッシャー>、つまり「親密さ」と「同調圧力」は、並存し表裏をなす性質のものであり、<ピア>に移行するなかで自立が達成されていくことが



示唆された。

本尺度の開発は、スクールカウンセリングの個別相談、あるいはニーズ・アセスメントや介入効果を測定するツールとしても有益なものと考えられる。

#### 【文献】

- 保坂亨・岡村達也 1986 キャンパス・エンカウンター・グループの発達の治療的意義の検討. 心理臨床学研究, 4(1), 17-26
- 保坂亨 1996 子どもの仲間関係が育む親密さ——仲間関係における親密さといじめ. 現代のエスプリ, 353, 43-51
- 保坂亨 1998 児童期・思春期の発達. 下山晴彦編 1998 教育心理学Ⅱ発達と臨床援助の心理学, 東京大学出版会, 103-125
- 福富護 1997 いわゆる『援助交際』に対する女子高校生の意識および背景要因の分析的研究. (財)女性のためのアジア平和国民基金
- 黒沢幸子 2001 チャムとピア・グループ(個人間差). 児童心理, 55(16), 136-143
- 黒沢幸子・森俊夫・有本和晃・久保田友子・古谷智美・寺崎馨章 2001 スクールカウンセリング・システム構築のための包括的ニーズ調査(その1)ー教職員用包括的ニーズ評価尺度 CAN-SCS(T-Version)の信頼性と妥当性一, 目白大学人間社会学部紀要, 創刊号, 11-25
- 黒沢幸子・森俊夫・有本和晃・中西三春 2002 スクールカウンセリング・システム構築のための包括的ニーズ調査(その2)ー保護者用包括的ニーズ評価尺度 CAN-SCS(P-Version)の信頼性と妥当性一,
- 目白大学人間社会学部紀要, 2, 27-41
- 黒沢幸子・有本和晃・森俊夫 2003 仲間関係発達尺度の開発ーギャング、チャム、ピア・グループの概念にそつてー. 目白大学人間社会学部紀要, 3, 21-33
- 宮台真司 1998 援助交際. 尾木直樹・宮台真司 学校を救済せよ. 学陽書房, pp160-193
- 森俊夫 2001 スクールカウンセリング・システムの評価研究. 文部科学省科学研究費報告書(課題番号: 10610100)
- 中野良顕・古屋健治・岸本弘 1998 学校カウンセリングと人間形成 学文社
- 岡安孝弘・高山巖 1999 中学生用メンタルヘルス・チェックリスト(簡易版)の作成. 宮崎大学教育学部教育実践研究指導センター紀要, 6, 73-84
- 斎藤憲司 1986 思春期における友人関係の発達の變化. 東京大学大学院修士論文
- 櫻庭隆浩・松井豊・福富護・成田健一・上瀬由美子・宇井美代子・菊島充子 2001 女子高生における『援助交際』の背景要因. 教育心理学研究, 49, 167-174
- 下山晴彦 1992 大学生のモラトリアムの下位分類の研究——アイデンティティの発達との関連で. 教育心理学研究, 40, 121-129
- Sullivan, H. S. 1953 Conceptions of modern psychiatry. W. W. Norton, New York (中井久夫・山口隆訳 1976 現代精神医学の概念. みすず書房)
- 手塚千恵子・古屋健 2001 前青年期から青年期にかけての友人関係の變化. 教育心理学会 43 回総会発表論文集, 213
- 上野行良・上瀬由美子・松井豊・福富護 1994 青年期の交友関係における同調と心理的距離. 教育心理学研究, 42, 21-28

APPENDIX 各因子得点のパーセンタイル値

